

セッション責任者	林 泉忠 (Lim Chuan-Tiong)
セッション名	「戦争・架け橋・アイデンティティ～近代日本と東アジアの文化越境物語～」
趣旨	<p>戦前の日本と東アジアとの関係は、戦争や植民地支配に集約される場合はしばしば見られる。そのため、戦前における日本と東アジアとの民間レベルの社会・文化交流の架け橋を担っていた人々とそのストーリーはよく軽視されてしまう。本セッションはあの激動の時代において戦争を超える日本と中国・東アジアの民間レベルの交流物語を取り上げ、国境や戦争を超える東アジアの文化交流の意味を検討する。</p> <p>報告1：「知られざる『旅愁』の越境物語～戦前東アジア文化交流の一断章～」(林 泉忠)</p> <p>多くの日本人は唱歌・「旅愁」は日本の名曲と理解している。また多くの中国人も中国の名曲と意識している。さらにこの歌は韓国においても台湾においてよく親しまれてきた。しかし、それは19世紀の半ば頃アメリカに生まれた Dreaming of Home and Mother (「家と母を夢見て」、作曲ジョン・P・オードウェイ [John P. Ordway]) に由来する。1907年に日本の作詞家で音楽教育者の犬童球溪によって訳され「旅愁」として音楽教科書「中等教育唱歌集」で取り上げられた。やがて日本の植民地になった台湾や朝鮮半島にも広げた。そして、東京留学中の中国若手音楽家・画家の李淑同の手で「送別」として中国に広く伝えられた。本報告は、近代「旅愁」の伝播軌跡の物語を通して、戦争時代の東アジアの文化交流の意義を再吟味する。</p> <p>報告2：「近代日本の左翼的科学者の中国における活動～上海自然科学研究所員小宮義孝を例に～」(李 嘉冬)</p> <p>小宮義孝は近代日本の寄生虫学者。東京帝国大学医学部在学中、社会医学を志す。のちに、マルクス主義に傾倒し共産主義のシンパとして活動していたため特高にマークされ監獄に入れられる矢先に、恩師の横手千代之助・東京帝大教授の助いで1931年上海に避難し日本の文化事業の上海自然科学研究所に入所し終戦まで大陸の寄生虫病の研究に従事。戦後は中国政府の要請を受け寄生虫撲滅の建議案を提出し、その結果、長年中国の農村部で苦しめられた日本住血吸虫病がほとんど収まることになった。本発表は小宮の上海自然科学所員時代にスポットライトを当て、彼の上海での生活及び中国人科学者・学者たちとの交流実態を明らかにしようとするものである。</p>
発表者、討論者、座長などの候補者の氏名と居住地	<p>発表者： 林 泉忠 (台湾・中央研究院)</p> <p>発表者： 李 嘉冬 (上海・東華大學)</p> <p>討論者： カール ヨハン・ノルドストロム (日本・都留文科大学)</p> <p>討論者： 篠原 翔吾 (北京・在中国日本国大使館専門調査員)</p> <p>座 長： 孫 建軍 (北京・北京大学)</p>